

# 法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-07-27

## 歴史なき心理学科で歴史を想う : 城戸幡太郎と矢田部達郎

吉村, 浩一

---

(出版者 / Publisher)

法政大学文学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Bulletin of the Faculty of Letters, Hosei University / 法政大学文学部紀要

(巻 / Volume)

49

(開始ページ / Start Page)

75

(終了ページ / End Page)

97

(発行年 / Year)

2004-03-02

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00003996>

# 歴史なき心理学科で歴史を想う

—城戸幡太郎と矢田部達郎—

吉村浩一

## はじめに

文学部創設80年目にして、法政大学文学部に心理学科が新設された。その意味で、本年度から文学部の心理学は新しい歴史をスタートさせたことになる。しかし、これまでの法政大学文学部に心理学の歴史がなかったわけではない。それどころか、このたびの心理学科新設により、わが国の心理学界に確かな足跡を残した法政心理の長い歴史に終止符が打たれたとさえ言えるのである。

奇妙な書き出しになったが、上の言い回しは大げさでない。わが国に私立大学の制度が確立された最初期に法政大学文学部に着任し、戦前一貫して特徴ある研究と教育を实践した城戸幡太郎じょうこふたろうの存在は、戦後においても彼を師と仰ぐ法政大学の心理学スタッフによって、近年まで脈々と受け継がれてきた。それに対し、本年度発足時の8名の心理学科スタッフの中に、直接・間接を問わず、城戸の学風を受け継ぐ者はいない。したがって筆者も、歴史上の人物への慣行として「城戸」と呼ぶことに抵抗を感じない。本稿前半では、城戸幡太郎の業績を中心に、わが国心理学界への法政心理の貢献を再認識したい。

後半では、「認知」をキーワードにスタートした文学部心理学科であることに目を向け、認知心理学の歴史を見通すよりどこを求めようとする提案を行いたい。1970年代以降、当時のわが国の若手研究者たちによって、認知心理学は積極的に取り入れられた。その背景には、蓄積した先行研究の歴史的呪縛から解放された“新しい心理学”を目指そうとの意図があったと思う。当時、行動主義やゲシュタルトの立場から心理学研究を行うには、50年の歴史を見据えてかから

なければならなかった。それに対し、研究のテーマも方法も新しい認知心理学なら、歴史の重圧から解放されると見込まれた。

しかし、21世紀を迎えた今日、認知心理学も50年近い研究成果を蓄積し、歴史を背負うことになった。今から振り返れば、認知心理学が見通すべき研究史は、近いところの50年だけではなく、行動主義からさえ古いと退けられたヴェルツブルグ学派などの研究も含め、百年の長きに及ぶ。ある研究テーマに分け入ろうとする若き学徒が、自らの力でそのテーマに関わる百年の研究史を直接、見通すことは難しい。古い文献の中には、英語のみならず、ドイツ語、フランス語のものも多い。「原典に当たれ」とは、確かに核となる研究に対しては守るべき鉄則だが、筆者を含め、今日のわれわれは、認知心理学の過去をひもとく信頼できるナビゲーターを必要としている。筆者は、その役割を託せる人物として、矢田部達郎をあげたい。何も1人の人物に頼ることはないと思われるかもしれないが、近いところの50年ならまだしも、そこからさらにさかのぼる50年の認知心理学の源流を見通せる眼力は、矢田部を措いてほかにない。筆者にとって矢田部は、学び育った京都大学教育学部の心理学創設に携わった人物としての親近感もある。筆者の恩師に当たる先生たち（それは矢田部にとっては弟子になるわけだが）から聞き及んだエピソードを交えながら、生きた矢田部像を提示していきたい。

新しい学科の設立は、そこで学ぶ者にとって、過去に拘束されない自由という強みをもつ。しかし他方、よって立つ基盤が脆弱で、どのようなテーマと向き合うにしても、根無し草になりかねない弱みをもつ。城戸を土壌とすることは、法政心理に学ぶ者の宿命である。そして、矢田部にナビゲーターの役割を求めることは、認知を柱に立てる心理学科の裁量である。城戸と矢田部、2人の生年は同じだったが、緊密な交渉があったわけでも対立していたわけでもない。2人の関係は、「漱石と鴎外」である。なぜそうなのかは、それぞれの解説の中で明かしてゆきたい。

## 第1節 法政大学の城戸幡太郎

### 1. 1 大学令による法政大学の誕生と城戸の着任

わが国の心理学研究室の歴史は、1888年東京帝国大学における元良勇次郎から始まる。それは、W. Wundtがライプツヒ大学に世界最初の心理学実験室を開設した1879年からわずか9年後のことである。遅れて京都帝大に、そしてその後次々に創設された帝国大学に、心理学研究室が設けられていった。それに対し、私立大学の設置は、1918年12月の大学令公布をまつことになる。法政大学がそれまでの財団法人和仏法律学校法政大学から財団法人法政大学へ、形態・内容とも画期的な変化を遂げ、大学令により大学として認可されたのは、1920年（大正9年）4月15日のことであった（『法政大学八十年史』p.249）。そして、1921年、法文学部の心理学関係の教員として最初に着任したのは高橋穰<sup>ななか</sup>であった。城戸の教授としての着任は少し遅れて、1924年9月であった。法政におけるこの時期の心理学教育の開始は、私立大学では最初期に属すると、松本（1937）の『心理学史』にも記されている。法政への着任当時の状況を、城戸（1978）は自らの70年間の研究生生活を振り返る自伝的書物の中で、次のように記している。

さて、わたしは帰国すると、間もなく法政大学の文学部教授を囑託されました。それは、わたしの尊敬する先輩の心理学者である高橋穰教授が、法政大学から東北大学に転任されるので、その後任としてわたしを推せんしてくださいだったので。

それでわたしは、心理学を担当するものとはばかり思っていたところが、当時まだ、法政大学の文学部には心理学の学科も講座もありませんでした。高橋教授も心理学ではなく倫理学を講義していたので、わたしにも倫理学を講義しろということで、いささか面くらいました。（p.40）

引用文中、「東北大学」とあるが、これは城戸の思い違いで、高橋自身の「学生生活の思い出」と題した文章には、「大正13年法政大学を辞し、母校一校の

倫理及び心理担任の教授となったのであるが、昭和5年倫理学講座担任の教授として東北大学に赴いた」(高橋, 1956)とある。

## 1. 2 児童研究所と保育問題研究会

法政大学での城戸の貢献で、まず上げなければならないことは、1929年9月の法政大学児童研究所の設立である。城戸が所長となり、毎週火曜、木曜の午後1時から3時まで、5歳から18歳までの児童・青年を対象とした知能に関する相談を行った。相談料は50銭だったと言う。心理学の学生も参加し、教育的にも大いに実習の効果を上げ、機関誌として、『心理学研究』を発刊した(『法政大学八十年史』p.433-434)。

さらに、1936年には、児童研究所内に、現場の実践と研究に協力する「保育問題研究会」を発足させ、機関誌『保育問題研究』(1937年10月創刊)を発刊した(『法政大学百年史』, p.450)。ここに記した「現場の実践と研究」こそ、城戸の生涯を貫く学風となる。同誌の研究会創立3周年記念特集号に寄せて、城戸(1939)は「我等の反省すべきこと」と題して、次のように記している。

研究会というものは、そこで研究の計画を立てることと、その結果を報告することなので、実際の研究は各自の職場でなくてはできないものです。研究は研究会に出席している時にだけできるものなぞと考えては大きな間違いだと思います。各自の職場で実際の研究が行われていない以上、いくら研究会に出て見たところで何の研究もできる筈がありません。(現代仮名遣いに改めた)

言葉遣いはやさしいが、研究会のメンバーである現場の保育さんたちにとっては厳しい注文である。忙しい日常の保育業務の中で、自ら研究者の目をもって主体的に取り組みと言う。城戸は、現場を育てる暖かさとともに、研究会を「仲良し集団」に終わせない気概をもっていった。「教育」を「科学」たらしめ、自ら提唱する「教育科学」の名にふさわしい活動へと押し上げる実践力が、教育に関わる城戸の基本姿勢であった。

城戸から直接薫陶を受けた弟子たちもそうであったが、今日でもなお、城戸

の業績を評論する研究のほとんどは、この分野、すなわち「教育科学」の唱道・実践者としての城戸を論じている（戦後、城戸は、北海道大学教育学部長、北海道教育大学学長などを歴任した）。その意味で、まずもってこの領域での活動を要約した。

しかし彼の貢献は、今日の認知心理学に直接つながる実験心理学者としても大きかった。ここから先は、この方面の城戸幡太郎に焦点を当て、私たちの研究室の大先輩が、日本心理学史に残した足跡を追ってゆきたい。

### 1. 3 東京帝大心理学研究室副手と講師

見出しに掲げたように、城戸は東京帝大心理学科の副手と講師（兼任）を勤めた。こう書けば、彼は日本の学問の中樞をぬくぬくと歩んだ印象を与えるが、実はそうではなかった。まず、旧制高校からの東大進学ではなく、早稲田予科に入ったものの試験に落第し、東京帝大心理学科へは選科生としての進学であった。元来、彼の興味は、政治学、社会学、進化論、哲学など幅広く、受験勉強に集中する学生ではなかった。彼は講義をさぼった。しかしそれは、興味をもつ本を読む図書館通いのためであった。

さて、選科生として進学した当時（1913年）の東京帝大心理学科は、元良勇次郎の病没と松本亦太郎の京都帝大からの着任というあわただしい時期にあった。彼が卒業論文で取り組もうと構想したのは、「感覚の発達」と題して、持ち前の幅広い興味から、動物から人類への進化の中で感覚がどのように発達してきたかを論じるという壮大なものであった。指導教官は、どう対応したか。城戸（1978）から、引用しよう。

ところが松本教授から、そういう大きい問題は、一年くらいでまとまるものではなく、卒論のテーマにむかない、「書き方」についての実験的研究をやれといわれた。わたしはためらったのですが、それを単に書記動作の実験的研究としてだけでなく、東洋の書論や書道、西洋のグラフィロジー（Graphologie）をふくめて、書の心理学的研究として卒論を書くことにしました。松本先生は、精神動作学というのをテーマにしておられ、書学とか筆蹟学とかにも関心をもっておられました。

わたしも、言語と文学との関係とか、「言語」には興味をもっていました。そういうものを問題としていけば、民族心理学との関係も出てくるのではないかと考えました。ヴントの民族心理学を講義できき、研究するなかで、民族の問題に関心をもっていましたので、実験的な方法として民族心理学と実験心理学とをどう統一していくことができるか、といったことを明らかにしなくてはならないと考えていたわけです。(p.19-20)

こうして作成した卒業論文のうち実験的研究部分だけが後にまとめられ、城戸を第一著者とする松本亦太郎・増田惟茂との共著『書及び書方の研究』(1919)に結実したのである。

この書物の刊行の年、城戸は東京帝大心理学研究室の副手に採用された。当時の彼の関心事は、もっぱら教育や歴史の問題を含み込んだ意味での「文化心理学」(ヴントの民族心理学に馴染むもの)であって、実験心理学ではなかった。そのようなこともあってか、城戸は副手をやめて私費でドイツ留学する決意をした。1922年、実家の「城戸屋」を売り払い、2年間、ライプツヒに留学した。ところが、ドイツ滞在によって、城戸と実験心理学との関係は、次の引用文(城戸、1978)が示すように、いよいよ屈折したものとなった。

ドイツの大学というところは、講座のセクショナリズムが非常に強いところです。たまたま一人のプロフェッサーのところへ行って研究すると、もう他の教授のところへは研究の相談なんか行かせない。わたしは心理学の歴史なども研究したかったので、クレムという助教授のところへ行ったのです。クレムが心理学史を書いていたからです。ところがクレムは知覚心理学をやっている、わたしに実験的研究をやれというのです。わたしは、ほかにクリューゲルがやっているような発達心理学、文化心理学も研究したいと思っていたのですが、やらせてくれない。それで、日本では機械がなくてじゅうぶん実験できなかった錯覚の実験的研究などをやりました。

ところが機械の調節がなかなかうまくいかない。鏡をまわして、それに映った像をみるわけですが、画面の調節が、回転させるためにうまくいかない。そうしたところ鏡がわれてしまった。第一次世界大戦後で、物資を

得ることがドイツでもなかなかできなかったわけで、その実験はとりやめになった。(p.30-31)

このようなこともあって、ドイツでの勉学は、日本から来ていた友人のツテで、教育学や哲学へと向かっていった。

帰国後は松本教授の計らいで、東大心理学研究室副手に戻った。そればかりか、1927年には、同研究室の講師（兼任）となった。時代は昭和に入っており、指導教官だった松本亦太郎は、自分たちの提案した60歳停年ルールを守り退官していた。それを機に心理学科でも兼任講師制が敷かれ、城戸は最初の着任者となった。しかも、その在任は10年間に及び、彼以降の講師の中で群を抜く長さであった。この人事について、波多野（1978）は、次のように評している。

城戸先生は心理学科への「選科」入学である。つまり、正規の高等学校生活をへて心理学科へ入ったのではないのである。ふつう、こういう人は、東大の内部に設けられた「本科編入」の試験を受ける。つまり、高等学校卒業と同等の資格ありとの認定を受ける。そうすると、そこではじめて、「文学士」の称号を受けられるというしくみであった。青木誠四郎さんとか、武政太郎さんとかは、すべてこういう手つづきをへて、東大卒の文学士になったのである。しかし、城戸さんはこのコースをとらなかった。したがって、「文学士」ではなく、たんなる「東大文学部修了」であった。こういう破格な学歴の人を、東大講師にすることは、むろん前例のないことではなかったろう。しかし、学歴尊重の当時の学界で、むずかしい作業であったことは事実である。松本亦太郎先生の政治力が、こういう人事をスナリとやることを可能にしたとおもう。そうして、そのウラには、松本先生がいかに城戸先生を愛しておられ、城戸先生の存在を貴重に考えておられたかがわかるとおもう。(p.209-210)

城戸の自伝的著作『教育科学七十年』の第2部として、「一門下生のみた城戸先生」と題する、波多野完治の文章の一節である。波多野は、城戸の東大講師





昭和5（1930）年，法大心理学科第1回卒業生との記念撮影  
 前列左から，留岡清男，波多野完治，城戸，三井透  
 2列目右から，奥田三郎，吉益修夫，枠内上：増田惟茂  
 （城戸，1978より転載）

着任当時の学生の1人であった。他に，依田新，山下俊郎，相良守次と，そうそうたる面々がいた。東大講師就任の数年前，ドイツから帰国したばかりの城戸は，本務として法政大学教授に就任していた。このような状況が両研究室の交流を生み，東大助教授の増田惟茂，卒業生の波多野完治，留岡清男，三井透，青木誠四郎などが法政に出講した。法政大学心理学の最初の卒業生たちとの記念写真を掲げておく。初期の法大生は，このような学的环境の中で心理学の薫陶を受けていたのである。

#### 1. 4 日本心理学会機関誌『心理学研究』の発刊

東大副手時代，城戸はまた，心理学専門誌の発刊にも貢献していた。当時，『心理研究』（明治45年1月創刊，毎月発行，心理学研究会編，当初は大日本図書発行。6号ごとに1巻とし，大正14年10月まで継続）という雑誌が出されていたが，この雑誌は必ずしも専門学術誌たることを目指したものでなかった（同誌復刻版が法政市ヶ谷図書館に全巻収蔵されている）。

これとは別に，京都帝国大学心理学教室が編集する『日本心理学雑誌』（大

正8年7月創刊)があった。この雑誌には、純粹に学術的な論文が収められていたが、ほぼ3年で編集・経費面で立ちゆかなくなり、大正11年、編集を東京帝国大学に移すことになった。移転にあたり責任者である松本亦太郎は、それまでの編集方針に対し、革新の主旨を3つ掲げた。その第3に、「實際生活と心理学とを結合して、人生の活動を整理する機関となることを期す」と謳われている。ずっと後(1975年)の座談会で、城戸は、この主旨を高く評価すると回顧しているが(『日本心理学会五十年史【第一部】』p.20)、おそらく松本の主旨宣言自体に城戸が関わっていたと思われる。この主旨こそ、先に述べた城戸の生涯の学風に他ならないからである。

『日本心理学雑誌』の東大移転当時、城戸は東大副手であり、ドイツ留学の直前であった。この雑誌は、岩波書店から出版されることになったが、そのことについても、また資金面でも、城戸は手を尽くしていた。学生時代、彼は岩波書店の店主、岩波茂雄と知己を得ていた。岩波の甥と、同郷の小学校からの友人(安倍能成の弟)の3人で、巢鴨に一軒家を借りて自炊していたのである。ところが、岩波の甥が病を得て亡くなった。当時、岩波茂雄は神田に古本屋を出した頃であったが、その後、出版社として盛んになった。そんな関係から、城戸は岩波茂雄と会って出版を依頼した。城戸はまた、同郷の先輩資産家から、毎月かなりの額の寄付を取り付けた。自らの意志に沿う新しい雑誌の発刊に、城戸は情熱を注いでいた。

京大での編集時からは軌道修正したものの、専門的で学術性の強い『日本心理学雑誌』は、経営的に楽でなかった。また、『心理研究』との併存も、お互いを圧迫した。そこで、話し合いを重ね、ようやくのこと機が熟し、両誌とともに廃刊とし、新たに『心理学研究』を大正15年から発刊する運びとなった。この年は、奇しくも昭和となり、『心理学研究』は昭和とともにその歴史を始めることになった(同誌も、第1巻から法政市ヶ谷図書館に収蔵されている)。松本亦太郎(東京帝国大学を60歳で退官したばかりで帝国学士院会員)、速水滉ひら(京城帝国大学教授)、増田惟茂(東京帝国大学助教授)、それに城戸幡太郎(法政大学教授)が編集員となった。城戸にしてみれば、先に東大での『日本心理学雑誌』発刊に尽力したものの、2年間のドイツ留学のため、あまり関与できなかったので、このたびの『心理学研究』への思い入れは強かったに違

いない。4人の編集員のうち、実質的には増田と城戸が、原稿依頼を取り仕切るなど、采配を振るった（創刊当時、投稿原稿はなく依頼原稿で編集されていた）。翌昭和2年、東京帝国大学で開かれた日本心理学会第1回大会では、「大会当日の受付は城戸幡太郎が指揮して多数の学生が二名の雇員とともにあたり、会場係は増田惟茂の担当で」と、2人は裏方として最初の大会の成功を支えた（『日本心理学会五十年史〔第一部〕』p.34）。

### 1. 5 増田惟茂と城戸幡太郎

増田と城戸、2人には10歳の年齢差があったが、よきライバルであったのだと思う。深いところで分かち合える同志という思いと、他方では相容れない価値観の違いも抱えていた。2人は同郷、四国松山の出身で、そのことも親交の背景にあったのだろう。増田の著書には、1冊のみならず、城戸が緒言を書いている。もちろんそのような場合、城戸は増田の著書を全面的に評価する。しかし、今日のわれわれには、2人の相違点に注目することが有意義である。

小笠原（1982）は、「増田惟茂」を論評する記事の中で、次のように記している。

彼〔増田〕の著書『実験心理学序説』が公刊されたとき、それを批評した城戸幡太郎（1927）との間に互いに相手の考えを哲学的であるとする哲学論争が繰り広げられたことがある（増田、1927）。しかし、筆者〔小笠原〕のみるところでは、増田の考えは通常の意味での哲学的ではない。そうではなくて、今日いうところの科学哲学または科学論がその基底になっているのである。もちろん、それは現在の心理学の科学論とは異なる面もあるが、とにかく増田の心理学は科学論的基礎から出発して堅実な足取りで進められており、それだけに論理的色彩が強い。（p.53）

ここに小笠原の論評を引用したのは、筆者（吉村）自身、小笠原の行司ぶりに賛同するからである。今日では、当時にも増して心理学はそのあり方が混沌としており、いよいよ科学論的見通しを必要としている。2人の対立点には、心理学が哲学に何を求めそれをどう活かしていくかを考えるヒントがあるよう

に思う。ごく最近、『心理学の哲学』（渡辺・村田・高橋編，2002）と題する心理学のあり方を正面から問う力作が編まれた。20人近い執筆陣のうち、心理学者と哲学者が相半ばしている。筆者（吉村）は、強い関心を持って、全編を読み通そうと意気込んだのだが、哲学者の書く心理学論の多くは、なぜか「自分の問題」として響いてこず、しかも読みづらい（これは、筆者の能力不足のためであり、心理学者一般に当てはまるわけではない）。2人の対立点を通して、筆者の抱いたこの素朴な感想の理由を考えてみたい。

盟友増田惟茂は、東京帝国大学助教授のまま、49歳で早世した。『心理学研究』（1933年）に、「故増田惟茂博士の生涯と学説」と題する追悼記事が即座に組まれた。「私より十七八年も若い増田君を追悼するなど云う事は嘗て夢想だもせなかった」と惜しみつつ淡々と増田の東大での業績を語る松本亦太郎の記事をはじめ、安倍能成、西田幾多郎、高橋穰など9編の追悼記事が掲載されたが、中でも城戸（1933）の追悼文「学説の発展について」は、ひときわ力がこもっている。そこでは、小笠原の言う“哲学論争”が、城戸自身により振り返られている。

私〔城戸〕がかつて増田さんの実験心理学序説を批評した時、増田さんはその弁駁において、「城戸君が雑誌や学会で自説を発表したり、他の研究を批判する時の態度を見るに、心理学なるものに其哲学的見解をも入れ込んで仕舞って、心理学は哲学を兼ねて居るかの様に見える。私〔増田〕に言わせると、グルンドはちき前景に出でて、フィグールと交錯して、一所になって仕舞う。従って其議論は間もなく同君の学的見解の全局の混乱場になる様である。私の態度は少し違う。心理学に関する議論である以上、其分限を守らしめようと努力する。グルンドの理由によって分限を與えようとする。従って実験心理学又は心理学は私の研究活動の全局を発現すべき場所ではない。城戸君の批評が私の考えに対して適切でなかったのは此相違からも来て居ると思う。即ち城戸君は自分の遺口を直ちに移入して、私も序説に心理学上の議論でなく、哲学上の考をも根底から残らず打ちまけたかの様に見做して評論せられた様である。私の著は「実験哲学」ではなく「実験心理学序説前編」である」といわれた。（p.813-814）

フィグールとグルンド、これはもちろん知覚心理学で言うところの“図と地”である。増田の城戸に対する批判は、心理学はフィグールに対する議論に徹すべきで、グルンドまで同等に取り込んだのでは焦点がかすんでしまうという点にある。それに対し城戸は、「私〔城戸〕のような態度で見ると、増田さんの思想におけるグルンドがつねにフィグールに見えてならぬ。私が増田さんの心理学を読むときにはつねにそのグルンドをほちくって見ることに興味をもっていった」と続けるのである。

今日の心理学は、客観性・科学性のもと、その研究自身の内的妥当性を重視し、増田の言うフィグールさえ問題にしない研究で満ちあふれている。むしろ、「問題にしない」のではなく「できない」というのが実状であろう。取り上げたテーマに対し、その長い研究史や関連する多方面からの知見を受けてフィグールを形作っていくことは、いよいよ難しくなっている。心理学を見つめる哲学者に求めたいことは、こうしたフィグールを鋭く浮かび上がらせる作業であって、グルンド自体を論じることではない。心理学の研究当事者が見失いかけているその作業を、鋭く指摘するフィグールの焦点化を求めたい。たとえば、門林（2000）のフェヒナーの精神物理学に関する哲学的論評などは、その好例である。精神物理学は、今日の実験心理学にとって非常に重要な研究パラダイムだが、この方法について百数十年前にドイツ語で書かれたフェヒナーの原著を読む心理学者はまずいない。こうした現状にあって、フェヒナーが本来描いていたビジョン、すなわち外的精神物理学と内的精神物理学に分けて精神物理学を構想していたことは、今日では忘れ去られているが、その点を指摘した門林の論考は、精神物理学のフィグールを浮かび上がらせる上で重要な貢献だと思う。

増田は、自身の心理学を体系化する道半ばにして、49歳で亡くなった。上記追悼文で、城戸はさらにこう続ける。

お互い無遠慮な批判をすることが楽しかった。如何なる学説に対しても無条件にこれを認容することなしに、峻厳な批判をもって臨まれる態度に敬服して、私も何か新しく思いついたことがあるとすぐ増田さんに話して

批判して貰った。研究室に増田さんががんばっていることが、どんなに私にとっては心強く、かつ愉快であったか知れなかった。

盟友増田の早すぎる死が、城戸をいよいよ実験心理学から離れさせ、1.2節で解説した「教育科学」「実践学としての心理学」へと向かわせることになったのかもしれない。

東京帝大で増田の跡を継いだ高木貞二と共同監修で、城戸は『実験心理学提要』（高木・城戸、1951-53）を編んでいる。これは、戦後長らく、実験心理学を学び研究する者たちのバイブル的ハンドブックであった。企画が起こったのは戦前だったが、諸事情のため出版まで15年を要した。企画時には城戸は、わが国における実験心理学の要にいた。しかし、戦争を挟み15年を経た出版時には、「教育科学」の研究へ軸足を移していた。そのことは決して批判されるべきことではないが、できあがった3冊からなる同書の中に、城戸が直接執筆する場所を得なかったことに寂しさを覚える。

## 1.6 「城戸屋」の一人息子

前節でも紹介したように、城戸と増田はともに四国松山の出身であった。城戸の場合、彼の学究生活は、松山の実家によって支えられたと言ってよい。彼の自伝的書物の始まり「教育研究にいきつくまで」の冒頭は、次のように始まる。

わたしは、夏目漱石の『坊っちゃん』にでてくる「山城屋」（ほんとうの屋号は「城戸（きど）屋」の一人息子として、1893年（明治26年）7月1日に松山で生まれ、育ちました。（p.3）

そして、中学時代は相当に理屈っぽかったようで、

数学の先生は『坊っちゃん』にでてくる“山嵐”，つまり堀田先生でした。二年の幾何の時間、先生は無限大を教えようと教壇に立ちました。先生は生徒にいろんな質問をし、自分が教えようとする方向に誘導するのがうま

かった。この授業で先生は「無限大の円がある。その半径はいくらか」ときいて、「半径は無限だ」という答を、生徒からひきだしたかったのですが、わたしはそれをよく知っていたから「無限大の円の半径は、その円の直径の半分です」と答えた。それで先生は無限大の授業ができなかったこともありました。(p.11-12)

城戸は、宿屋商売を継ぐのがいやで、東京に出てきた。しかし、「城戸屋」の一人息子であったことが、陰に日向に城戸の学究生活を拓いてくれることになった。東大の副手時代、私費でドイツ留学を果たせたのも、実家の「城戸屋」を売り払ってのことであった。また、『日本心理学雑誌』の東大移転に際して、同郷の先輩資産家から毎月かなりの額の寄付を取り付けたのも、おそらく「城戸屋」の坊ちゃんであったことと無関係であるまい。城戸屋の一人息子であったことが、夏目漱石の松山滞在を通して、東京で学問を志す城戸にとってグランドになっていたと言えよう。

城戸の生涯の業績のうち、ぜひ触れておくべき書物に『心理学問題史』(1986)がある。歴史についての彼の興味と造詣は、学生の頃の「民族心理学」「文化心理学」への関心から生涯一貫していた。戦前の法政大学在職中にも『心理学史(上)』(1936)を上梓している。それから50年を経て世に問うた、研究生生活の総決算とも言うべき『心理学問題史』は、おそらくわが国の心理学者が書いた心理学史の中でもっともユニークな著作であろう。心理学はその時代その時代、何を問題にしてきたか、そういった観点から、ギリシャ哲学以来の心の研究史を捉えた意欲作である。ここでも彼の学問観から、フィゲールのみならずグランドにまで全力で取り組んでいる。

城戸80歳の祝賀記念として、後輩やお弟子さんたちが、『日本の心理学』と題する論文集を計画した。ずいぶん大きなタイトルである。しかし、城戸のわが国心理学界で果たした業績には、本稿での論評からも分かるように、このタイトルにふさわしいものがあつた。出版にはずいぶん時間を要したが、幸いにも城戸の長寿のお陰で、米寿記念として刊行された。城戸の法政時代の学生で、戦前に助手を務め、戦後長らく法政大学文学部心理学教授として城戸の学風を

継いだ乾孝による「法政大学時代の城戸幡太郎先生」と題する解説も収められている（乾はまた、『日本心理学会五十年史〔第一部〕』に戦前の「法政大学心理学研究室」の紹介記事（乾，1980）を寄せている）。その他、充実した執筆陣を得て、わが国の心理学史全般を覆う貴重な論文集となった。筆者（吉村）の専門領域に関しても、梅津（1982）の「順応変換」という優れた論考が収められている。

## 第2節 認知心理学の源流としての矢田部達郎

### 2.1 カルチエ・ラタンの矢田部達郎

城戸と漱石の関係が『坊つちやん』を介した間接的なものであったのと同様、矢田部と鴎外の関係にもある人物が介在していた。鴎外の愛娘、森茉莉である。後に作家、エッセイストになる彼女だが、矢田部と関わった頃は、フランス留学中の夫、山田珠樹とともにパリにいた（1922年）。茉莉，19歳の頃である。森家の長女として、父親（鴎外）に溺愛され、16歳で山田家に嫁いでいた。後に、2度の離婚を経て50歳を過ぎてから創作活動に入ったのだが、ここでテキストとして引用するエッセイ集『記憶の繪』は、幼少時から始まり、山田珠樹と離婚するまでの若き日の思い出を綴った作品である。フランス滞在は、この作品のハイライトである。彼女の在仏中の精神生活は、夫の友人で、パリの安アパート「ホテル、ジャンヌ・ダルク」で日本人梁山泊仲間として過ごした、10歳年上の矢田部へのあこがれに重心が置かれていた。作品中、「矢田部達郎」と題する一節に、次のような記述がある。

一高経由帝大卒の心理学者である矢田部達郎は、十年を数えたばかりで、すっかり大正の色に変わってしまった中で明治人間のスケエルの偉きさをがっちり体につけていて、彼の傍若無人の恋愛状態は、周囲の誰にも既に家常茶飯事となっていた。蠟涙の滴る瑕だらけの机の上で、一晩でショオペンハウエルを平げる、といった、明治後期の一高の寮生の、一種野蠻な知性をもった魅力が紺の背広の下にまだ荒々しく息づいている。こう言っても現代の読者には一つの明瞭した映像が浮かばないかもしれないが、



当時の巴里で、矢田部達郎が発揮した大正初期の一高的な魅力は、昭和のジェムス・ディーンの原型と思って貰えば、<sup>ほぼ</sup>略当っている。(彼にはディーンの幼児性はなかったが) 動作は荒々しいが、ひどく洗練されている。気概と自信が荒鷲のように内に<sup>はばた</sup>羽搏いている彼は、ニジンスキイの女弟子のロオゼンシュタインの家で友だちが能を演って見せ、そこへニジンスキイ夫妻が見に来た夜も、一高生的背広に<sup>よ</sup>擦れたネクタイで、風呂敷に包んだ既成の能衣装を持って現れ忽ちロオゼンシュタインの心臓を捉えた。<sup>あ</sup>箕作新六の子供の光子のナンスだったフリイダ、ジャンヌ・ダルクの女中のエルネスティヌ、すべて矢田部崇拜患者で、憧憬の眼差しはいつも彼を囲んでいた。(p.287-288)

森茉莉にとって矢田部は、鮮烈さを与えるあこがれの人物だったに違いない。エッセー集『記憶の繪』は、次のように結ばれている。「相談をしたかった父親も、矢田部達郎も、一人は土の下に、一人は九州に、去っていた。私は一人で考え、一人でこの家を出た。」

## 2. 2 破格の人

帰国後、矢田部はしばらく静岡高校に奉職していたが、その後九州帝大に赴任する。そして、本稿でその重要さを主張する2つの心理学史、『意志心理学史』(1942)と『思考心理学史』(1948)をはじめ、思考心理学に関する著作を生み出してゆく。

矢田部に魅了されたのは、パリの「ホテル、ジャンヌ・ダルク」梁山泊をめぐる人たちがかりでなかった。本稿冒頭で触れたように、矢田部は終戦前(1944年)に京都帝大に赴任し、戦後、新制京都大学の教育学部心理学の創設に貢献した。所属は文学部で、教育学部は併任であった。筆者(吉村)が京都大学教育学部に学んだ頃(1971年学部入学)は、矢田部のお弟子さんたちが、文学部、教育学部、教養部に分かれて教鞭を執っていた。それぞれに個性豊かな先生たちだったが、どの先生も矢田部のスケールの大きさには一目置いていた。

矢田部達郎は1958年に死去したが、没後20年を機に、京大心理の先生たち

を中心に、『矢田部達郎著作集』が企画された。そして5年後の1983年、10巻からなる全巻が一気に出版された。全巻の冒頭に、「矢田部達郎先生著作集の刊行にあたって」と題する八木<sup>べん</sup>先生の序文（八木、1983）が掲載されている。そこには、お弟子さんたちの、矢田部心理学に対する思いが現れている。一部を引用しよう。

「矢田部心理学」ともいわれる先生の立場は、先生の同時代の日本の心理学者のそれとややその色合いがちがっている。それは広義の行動学であるが、生体の低次から高次に至る精神活動を、生物学的な平衡維持の法則を一般原理としながら、さらに階層的に把えようとするところに、その一つの特徴があるように思える。私見を許していただけるなら、それは、当時としては稀であったフランスのソルボンヌへの、先生の若き日の留学体験によるところが多いのかも知れない。思弁的な理論よりも事実を中心とする実証的立場を重視し、さらに心理学的諸事実を傾向として段階的に秩序づけようとする伝統的なフランス心理学の影響が、先生の著述の中に散見される。（p.ii, 傍点原著）

「矢田部心理学」に対する評価は、八木先生のこの記述にあるように、スケールの大きな、独自の心理学体系の実現にある。そしてそれが、欧米の徹底した文献渉猟に裏づけられていた点に、弟子である「著作集」刊行実行委員の先生たちは一目も二目も置いていた。上の引用文の直後に、「君たちの語学力ではとても大変だから、ほかが重要論文のエッセンスをまとめてあげるから、それをもとにして前進しなさい」との矢田部の言葉が紹介されている。謙虚とは言えないこの物言いが、後の京大教授たちに素直に受け入れたところに、矢田部のスケールの大きさが感じられる。筆者の学生時代、教育学部教授だった梅本<sup>なかむら</sup>先生は、コンパの折りなどに、矢田部が祇園のお茶屋から講義に出向いたことや、自宅での研究会ではベッドに寝ころびながら豪気に指導していたことを話されていた。しわがれ声のデカンショー高生＝矢田部とはおよそ相容れない、上品で芸術家肌の梅本先生の、あこがれにも似た話しぶりに、印象を強くした思い出がある。

## 2. 3 事典としての矢田部達郎

矢田部心理学の真価は、驚異的な欧米文献の渉猟に裏打ちされた、独自の心理学体系にある。弟子である「著作集」刊行実行委員の先生たちは、このうち後者、すなわち「独自の心理学体系」を後世に伝えることに使命感をもっておられたのだと思う。その意味での矢田部心理学の神髄は、著作集第1巻に再録された『心理学序説』（1960）に結実している。しかし現在、刊行実行委員の先生たちの弟子に当たるわれわれの世代は、残念ながら矢田部心理学を体系として受け継いでいない。それに対し、矢田部の「驚異的な欧米文献の渉猟」は、その一端でも知れば、世代が下るほど驚異の念を強くするはずである。そこには、これからの心理学にとって必要な過去の知見が満載されている。

そこで、『矢田部達郎著作集』全10巻のうち、第2巻から第7巻までの6冊を、過去百年間に蓄積された認知心理学に関する重要知見の前半期における事典として役立てることを提案したい。6冊の表題は、

矢田部達郎著作集2 意志心理学史

矢田部達郎著作集3 思考心理学史

矢田部達郎著作集4 思考心理学1：概念と意味

矢田部達郎著作集5 思考心理学2：関係と推理

矢田部達郎著作集6 思考心理学3：動物の思考

矢田部達郎著作集7 思考心理学4：比較と推理

である。多くの巻に「認知心理学」ではなく「思考心理学」と冠されているのは、当時まだ「認知心理学」という用語が使われていなかったからであって、内容的には「認知心理学」と言ってよい。第4巻を編集した本吉良治先生も巻末解説（本吉，1983）で次のようにコメントしている。

思考心理学というよりも認知心理学といった方がより内容にふさわしいこの書は、思考を説きながら、つねに知覚活動と比べて、人間の知的機能を全体として論述している。このように広い視野から思考活動を論じた書物は他に類を見ない。認知心理学として世界最初の業績であるといってよい。  
(p.460)

「世界最初の業績」とは大げさに響くが、この第4巻に収められている「概念と意味」の緒言には1947年とあり、『意志心理学史』の初出年が1942年であることを考えると、まさに「世界最初の業績」と言うべきである。第4巻だけをとっても千を越す文献引用があり、その点からも百年の研究史前半の優れた事典たりうる。

筆者の恩師<sup>おさか</sup>苧阪良二先生は、『著作集』の最終巻「カッシラア」に関する矢田部の業績を編集されたが、巻末解説（苧阪，1983）で次のように記している。

矢田部先生の序文は昔から定評があった。深さがあってしかも理解し易い。読者はまず、『言語』・『神話』・『認識』の三部作の「訳者序」をまとめて読んでほしい。原著者が必要とした語数よりも少ない語数ですべてを言いつくすのはより優れた才能によってのみ可能であるがと断りながら、価値あるものは一小部分でもおろそかにしないと述べられている。晩年のカッシラアはレッシングを引用して「大著は大悪である」と反省している。先生の手許にあった原著（初版本）は現在大阪市立大学にあり、それらをひもとかせてもらったが、最後の一頁まで、エンピツの跡がついていた。訳書の章と節は原文と一対一で対応しており、題目の省略はなかった。強いていえば、三分冊の表題のうち、神話的思考が『神話』に、認識の現象学が『認識』に略称されているところだけであった。訳書名の方がすぐれているようにさえ思える。京都学派の『哲学年鑑』第一集（昭和十八年）の中の歴史哲学、文化哲学の著訳書目録には矢田部達郎要訳とあり、この序文のくだりが引用されている。まさに要約でも抄訳でもなく要訳である。（p.551）

事典としての役割を託す上で、矢田部が「要訳」力に優れているというのは心強い。矢田部の文献渉猟が現在の認知心理学の歴史的検討にとって重要であることは、コンパ時のエピソードを先に紹介した梅本先生の文章でも指摘されている。

この時代 [1900年前後のヴェルツブルグ学派の時代] のドイツ語圏の心理学者では今日ほど分業が進んでいなくて、多くは哲学者や論理学者を兼ねており、哲学におけるその時代までの認識論の歴史を踏まえて研究している上に、徹底的な考察を行っているので、現代の認知心理学で問題にされているトピックや考えは、その大部分がすでに萌芽の形でその研究の中に見られる。このことは、すでに矢田部達郎の『思考心理学史』[1948] に詳述されている…… (梅本, 1984, p.41)

矢田部の著作物を事典として活かそうとの提案は、歴史に正面から取り組みということではなく、研究上必要が生じたことがらについて、矢田部を参照せよということである。そのことは、矢田部自身の持論でもあった。『著作集』第7巻巻末で平野俊二先生は次のように解説している (平野, 1983)。

私 (平野) が学生として先生の演習に参加させていただいたのは、先生が思考心理学の著述を完成された数年後のことであった。テキストにボーリング『実験心理学史』を用いられ、それでいてその余暇によく「君たちは歴史をやらなくてもよい、現代の問題に取り組むことに専念せよ」と教えられ、かつは励まされた。実験心理学の門をたたく学徒には到底「歴史」に深入りすることの困難な実情を、歴史をきわめられた先生が察しておられたのであろうか。あるいは、現代の問題と取り組んでどこかで壁にぶつかったその時に、先人の跡をふり返って見よ、故きを温ねて新しきを知るにちがいない、とお考えになっておられたのであろうか。(p.558)

本節では、矢田部からの直接引用ではなく、弟子たちの証言により矢田部像に迫った。筆者 (吉村) は、矢田部の著作を事典として活かすことを提案しているわけである。事典のどこか一部を引いて、そのエッセンスを伝えることなどできるはずがない。次節では、ごく一部の紹介にすぎないと断った上で、矢田部の著作に直接、言及したい。

## 2. 4 無心像思考をめぐる研究

1970年代、10年間を費やして認知心理学では“イメージ論争”なるものが繰り広げられた。米国で火が付き、わが国でも新進気鋭の認知心理学者たちがこの論争に加わった。イメージとは、絵のように視覚的なものか、それとも、そう思えるのは実は主観的随伴現象にすぎず、イメージの本質は命題のような非視覚的なものなのか、をめぐる論争であった。

このテーマを扱う論文の多くは、問題展開の冒頭に、かつてヴェルツブルグ学派の論じた“無心像思考”がこのテーマの原点にあることに言及する。しかしそれは、いわゆる議論を起こすまくらとしての言及にすぎず、当時の研究に深く立ち入ることはほとんどない。というより、多くがドイツ語で書かれ独特の理論的構成概念で彩られたヴェルツブルグ学派の研究を直接参照する力をもっていないのである。このような事態に直面したとき、事典としての矢田部の著作が、わが国での力強いナビゲーターとなる。

『思考心理学史』（『著作集』第3巻）では、「無心像思考の問題」と題して、百ページ以上にわたり、この問題をめぐるヴェルツブルグ学派の諸研究を要訳している。解説は、「第1節 ヴェルツブルグ学派の研究」「第2節 ヴェルツブルグ学派のその後の発展」「第3節 ゼルツの研究」の3節に分かれる。別格と見るや、同じヴェルツブルグ学派にあっても、ゼルツの研究を独立させ、50ページ近くを費やし詳述している。また、『著作集』第4巻の『概念と意味』では、「意味と心像」と題し、渉猟範囲を英語圏でのイメージ（心像）をめぐる研究に移し解説する。「(19世紀までの)歴史」、「無心像説」、「感覚説（心像説）」、「行動説、運動説」と続く、70ページにわたる解説である。

### おわりに

城戸幡太郎と矢田部達郎、2人の関係を「漱石と鷗外」と洒落て、一編の中で結びつけた。だか、2人を結びつけるものは他にもある。それは、討論の精神である。城戸の節で引用した「一門下生のみた城戸先生」を書いた波多野治は、城戸が老大家に対してまで、純学問的動機から批判し議論を挑んだことを評価している。同じ波多野（1982）は別のところで、「城戸先生と同じく、

日本の学会に討論の気風をもちこもうとされたのは、矢田部達郎さんである」と書いている。学問は、こだわらなければ深まらない。「討論の気風」は、2人のとったそのための実践であった。

城戸や矢田部の時代は旧制高校、および帝国大学（中でも文学部）を中心に、“教養”という言葉が光彩を放っていた。それは、現在のいわゆるカルチャー・センターで言うところの教養とは違って、ずっとハードで体系的で、生き様そのものと言ってよいものであった。人生観・世界観に関する哲学的・文学的探求，社会的価値意識から政治思想に至るまで，ものを知らないことを恥とする“教養主義”の時代であった。そのような学的風潮の中で，城戸と矢田部は間違いなく第一級の“教養”人であった。翻って，現在のわれわれを取り巻く学的環境は，大学の大衆化と実用主義化の流れの中で，“教養”が，あるいは軽んじられ，あるいは忌避される傾向にある（竹内，2003）。その中にあって，2人の先人の先見性は，“教養主義”を超えるところにあった。城戸は，実践することで，単なる“教養”に終わることを乗り越えた。矢田部は後の世代に，後ろばかり見ずに前に進めと号令し自らの教養を未来に活かそうとした。

最後に，城戸の米寿を祝って出版された『日本の心理学』の中で，矢田部に最も近いところにいた園原（1982）が「矢田部達郎」を解説していることを付け加えて，本稿を終えることにしたい。

### 引用文献

- 波多野完治 1978 一門下生のみた城戸先生 城戸幡太郎（著）教育科学七十年 第二部 城戸先生を語る p.205-253.
- 波多野完治 1982 城戸幡太郎先生と学風 「日本の心理学」刊行委員会（編）日本の心理学 日本文化科学社 pp.499-510.
- 平野俊二 1983 解説 矢田部達郎著作集 第7巻 培風館 pp.557-559.
- 法政大学（編）1961 法政大学八十年史
- 法政大学百年史編纂委員会（編）1980 法政大学百年史
- 乾孝 1980 法政大学心理学研究室 日本心理学会（編）日本心理学会五十年史〔第一部〕 金子書房 pp.253-255.
- 乾孝 1982 法政大学時代の城戸幡太郎先生 「日本の心理学」刊行委員会（編）日本の心理学 日本文化科学社 pp.511-523.

- 門林岳史 2000 G・Th・フェヒナーの精神物理学 現代思想, 28, 4月号, 142-166.
- 城戸幡太郎 1927 増田惟茂氏『実験心理学序説』を読み 心理学研究, 2, 526-538.
- 城戸幡太郎 1933 故増田惟茂博士の生涯と学説「学説の発展について」 心理学研究, 8, 813-820.
- 城戸幡太郎 1936 心理学史(上) 日本評論社
- 城戸幡太郎 1939 我等の反省すべきこと 保育問題研究, 3 (9), 16-17.
- 城戸幡太郎 1978 教育科学七十年 北海道大学図書刊行会
- 城戸幡太郎 1986 心理学問題史 岩波書店
- 城戸幡太郎・松本亦太郎・増田惟茂 1919 書及び書方の研究 心理学研究会
- 増田惟茂 1927 城戸君の拙著『実験心理学序説』に対する批判に答ふ 心理学研究, 2, 749-774.
- 松本亦太郎 1933 故増田惟茂博士の生涯と学説「学的生涯の追憶」 心理学研究, 8, 806-810.
- 松本亦太郎 1937 心理学史 改造社
- 森茉莉 1992 記憶の繪 ちくま文庫 (初出, 1968)
- 本吉良治 1983 解説 矢田部達郎著作集 第4巻 培風館 pp.459-460.
- 日本心理学会(編) 1980 日本心理学会五十年史 [第一部] 金子書房
- 小笠原慈瑛 1982 増田惟茂 『日本の心理学』刊行委員会(編) 日本の心理学 日本文化科学社 pp.50-56.
- 学阪良二 1983 カッシラア・レヴィン・ヤタベ 矢田部達郎著作集 第10巻 培風館 pp.551-556.
- 園原太郎 1982 矢田部達郎 『日本の心理学』刊行委員会(編) 日本の心理学 日本文化科学社 pp.87-93.
- 高木貞二・城戸幡太郎 1951-1953 実験心理学提要 第1巻～第3巻 岩波書店
- 高橋稔 1956 学究生活の思い出 思想, No.380, 183-198.
- 竹内洋 2003 教養主義の没落 中公新書
- 梅本堯夫 1984 認知心理学の系譜 大山正・東洋(編) 認知心理学講座1 認知と心理学 pp.33-72.
- 梅津八三 1982 順応変換 『日本の心理学』刊行委員会(編) 日本の心理学 日本文化科学社 pp.287-308.
- 渡辺恒夫・村田純一・高橋滯子(編) 2002 心理学の哲学 北大路書房
- 八木冕 1983 矢田部達郎先生著作集の刊行にあたって 矢田部達郎著作集 培風館
- 矢田部達郎 1942 意志心理学史 培風館
- 矢田部達郎 1948 思考心理学史 培風館
- 矢田部達郎 1983 矢田部達郎著作集 全10巻 培風館